

未来生活懇談会報告書（14年12月） 抜粋

【未来生活懇談会】

人口構造の変化、IT化の進展等の時代の潮流変化を踏まえ、構造改革を通じてすべての国民が生きがいのある人生を送ることができるような「未来の生活」を実現するために、内閣官房長官と経済財政政策担当大臣の共催で平成14年5～12月に開催された懇談会。

- ・未来生活を描いてみよう
(2030年頃に至るまでの期間を念頭に置いた生活の変化)

(住まいをとりまく環境の変化1)

住民参加で新しいまちづくり

堀尾有美さんはNPO法人のスタッフとして、市役所の総合カウンターで受付案内をする傍ら、さまざまなまちづくり活動に参加しています。行政側も市民の力を積極的に活用して、質の高い行政サービスを提供しています。

～よりよいまちづくりへの思いを持つ人に～

NPO法人のスタッフ、堀尾有美さん(25歳)は、都心から西へ30キロ、昨年、多摩地区の4市が合併して誕生した“ガーデンシティ市”の閑静な住宅地に両親と住んでいます。有美さんは、午前中はガーデンシティ市役所1階の総合カウンターで受付案内をする傍ら、午後はNPO法人「むさしのの自然と環境を守る緑の会」のスタッフとして、さまざまなまちづくり活動を行っています。

有美さんが、自然や環境に関心を持ち始めたのは、学生時代に初めて訪れたイギリスで、ロンドン郊外の美しい田園風景を知ってからです。ロンドンの中心部から北に30キロ、車を1時間も走らせると、緩やかな勾配のある野原に牛や羊が草を喰む風景が、夢のように現れるのです。美しく広がる田園風景の中で、「都市と田園が巧みに共存する、豊かで、理想的な都市生活が日本でも実現できないだろうか」と考えたことが、NPO法人で活動するきっかけになりました。

有美さんが活動するNPO法人は、発足当初は、緑地や緑道、野川などの環境美化が主な活動でした。しかし、現在では、これらの活動に加え、ガーデンシティ市が行う都市計画事業にかかるコンサルタント業務や、市民運動公園、市民植物公園の管理事務などの行政サービスの代行業務などを行っています。特に近年は、行政が市民の力を積極的に活用し、質の高い行政サービスを提供するようになり、ガーデンシティ市では、多くの市民に行政への参加を呼びかけ、また登用を行っています。すでに市民ホールや図書館、老人福祉センターなども、NPO法人をはじめとする市民団体に業務委託をするようになってきました。有美さんが市役所で受付案内をしているのもこのためです。

現在、有美さんは、身近にあるみどりを守り育てる運動「100万本緑化運動」を進めるとともに、他の市民団体や、市民らとともに、ガーデンシティ市のまちづくりセンターから事業委託を受け、みどりに関する新しいしくみを考える「エコビレッジ構想」づくりに取り組んでいます。NPO法人は、新たな公益活動の担い手として、環境をはじめ、子育てや介護、防災、犯罪防止など、生活にかかわるさまざまな分野で、行政や企業のパートナーとして、重要な役割を担っています。

(住まい選びの変化2)

週末田舎暮らしで自然を満喫する

神奈川県川崎市に住む上杉さんは、甲斐駒ヶ岳山麓で週末田舎暮らしを始めて10年になります。3年前、甲斐駒ヶ岳山麓に古い農家を再生して、老後になってもそのまま住み続けられるように配慮した“草庵”を完成させました。

～都会の喧騒から離れ大自然の中で癒されたい人に～

神奈川県川崎市内の分譲マンションに住む会社員、上杉五郎さん(51歳)一家が、週末田舎暮らしを始めるきっかけとなったのは、今から10年以上前になります。

それは、その頃まだ小学生だった長男の健斗さん(20歳)と長女の美紀さん(19歳)、さらに妻の陽子さん(48歳)とで参加したグリーン・ツーリズムでの体験でした。夏休みを利用し、農村に出かけ、農村生活を体験することは当時すでに一般的になっていましたが、上杉さん一家は初めて参加したツアーで、甲斐駒ヶ岳山麓の自然にすっかり魅了されてしまいました。北に八ヶ岳、西に甲斐駒ヶ岳、景色が素晴らしい上に、空気も、水も、米も美味しい。上杉さん一家は朝から林を分け、川で泳ぎ、鱒を釣り、田舎生活を存分に味わい、そして、3年前について甲斐駒ヶ岳山麓に“草庵”を完成させました。300坪の土地に35坪の平屋建。地元の古い農家を再生した、いぶし瓦葺きの伝統的な日本家屋です。グリーン・ツーリズムで親しくなった農家を介して、地元の「古民家再生の会」に話を通してもらったところ、話がトントン拍子に進みました。

柱や梁は150年以上も前の昔のもので、冬になれば、薪ストーブと囲炉裏で暖をとります。しかし、上杉さん一家の自慢はこれだけではありません。密かな自慢は、老後になってもそのまま住み続けられるように配慮した住宅仕様です。将来の車椅子生活も考え、家の中はいっさい段差をなくし、廊下やトイレは車椅子が使えるように広く、また浴室・トイレは壁面に握り棒をつけるなど、さまざまな点で配慮を施しています。そして、それが住宅の品質確保の促進等に関する法律で定められた日本住宅性能表示制度で“優良”住宅の格付けがされています。現在、バリアフリー等の条件はすでにスタンダードになっていますが、数年前から、新築住宅に加えて、中古住宅もその対象となり、住宅市場の中でそれに応じた評価がなされるようになってきています。上杉さん一家は現在、土曜日から日曜の夕方まで“田舎生活”を満喫していますが、セカンドライフは、自然あふれるこの豊かな大地でと考えています。

通商産業政策ビジョン（70年代）
（昭和46年5月）・抜粋

序 説

各時代はそれぞれに特有の条件と課題によって性格づけられている。

1945年8月15日から始まる4分の1世紀は、日本の歴史の上に、ひとつの明らかな時代を画した。天明の飢饉、応仁の大乱を思わせる飢餓と、焦土の巷から、20余年の間に、みずからもいぶかるほどの、「GNP大国」が作りだされた。

この大国は、たしかに、多くの欠陥や矛盾を内包している。しかし、それにもかかわらず、これを20余年の古の荒廃とくらべるとき、われわれは、われわれ日本人がなすとげた事業の偉大さに印象づけられるのである。

かつて、われわれが、まず望んだことは、飢寒の克服であった。次に望んだことは、一面では、より豊かな物質生活の享受であり、他面では、欧米の後塵を拝したくないという明治以来の国民的向上心の満足であった。第1の望みは昭和20年代にほぼ充足される。昭和30年代以降になると、第2の望みを達成するべく、国民的な努力が払われ、欧米諸国がいうところの「日本経済の奇跡」が実現された。

なぜ、このような奇跡が実現のものとなりえたのか。その過程の全面的な解明は、なお今後の研究にまたねばならない。

しかし、われわれは、ともかく、これだけのことをなすとげたことに対して、相応のほこりをもってよいであろう。産業と産業政策もまた、この嵐と波の時代、民族的飛躍の時代に、その成功の一端をになった。われわれは、今日、世界一流の重化学工業をもっている。昭和24年、360円レート設定の年、わずか5億ドルに過ぎなかった輸出は、今や、200億ドルを突破するに至っている。この間、日本国民は、窮乏し、耐乏し、貯蓄した。この貯蓄の大きな部分が重化学工業における投資に積極的に誘導され、その結果鉄鋼、家電等精強な産業が育成されたのである。これらの産業の発展は、いうまでもなく、雇傭と所得の飛躍的増大をもたらした。かくして、後発工業国、窮乏敗戦国という二重の負担およびその克服という歴史的課題はみごとに解決され、その結果われわれの哀歓を塗り込めたひとつの時代が終わろうとしている。それはたんに戦後の終わりではなく、明治100年の終わりでもあ

る。黒船に驚倒した日本は、今や、世界最大の黒船輸出国となった。明治の人々が夢にも望みえなかったことがすでに平凡な事実となっている。

さて、ひとつの時代の終わりは、新しい時代の誕生を促す。ひとつの時代が嘗々として作りあげた成果と、その裏側に蓄積された矛盾や硬直が、次の時代をよびおこすのである。

今まで、われわれは、はるかな「坂の上の雲」をみつめて、細いけわしいひとすじの坂道をわき目もふらずにのぼってきた。その努力の上に、日本経済は今、ひとつの峠に立って、広い世界をみはるかすに至っている。

今や、国民の基礎的な欲望が充足される結果、たんなる「もの」ではなくて、「より美しいもの」さらには、きれいな水、澄んだ空気、住みよい都市、心づかいの行きとどいた国土、あるいは生活の安定感、仕事の充実感等を求めて、国民の欲求はまさに百花撩乱のおもむきを呈している。

したがって、産業は「もの」と公害とを同時併産してもよいというような単細胞的思考行動様式を離脱し、知恵の限りをつくして、この多彩な欲求に対応することが要請されるに至っている。

(以下略)